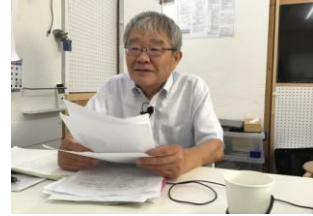


UCO「大阪市をウォッチする」収録

9 日午後、西九条の事務所で UCO（大阪コミュニティ通信社）ネットラジオ収録があった。「山田明の大阪市をウォッチする」である。もう 16 回公開されているが、後悔せずに続けている。写真は前回の収録風景。だんだん慣れてきたが、最初のうちは緊張した。でも、やさしいスタッフのおかげで言いたいことを言わせてもらっている。今回は 5 回分を収録したが、忘れないために記録しておく。



17 回分は『ジャーナリスト』「月間マスコミ評」10 月号に寄稿した原稿をもとに、地球環境危機の時代に相変わらず繰り返される大規模開発、なかでも大阪の夢洲開発に警鐘を鳴らした。私のレポートにも書いたが、マスコミ評に寄稿して 17 年にもなる。今回は夢洲での万博とカジノに絞り問題を投げかけた。とりわけジャーナリストに夢洲開発の現実を知ってもらいたいからだ。

18 回分は、夢洲 IR カジノの現状について。9 月 27 日の市長会見全文によると、横山市長は「事業者側と協議してきて、一定地盤の方向性もめどがついて」、国への申請に至ったと発言している。この間の経過が市長発言に集約されているのでないか。夢洲の IR 用地の地盤対策についての「合意」ができたので、カジノ業者も契約に応じたのではないか。大阪市との協議でも、IR 推進局の担当者から、同じような感触を得た。来年の夏ごろには、事業者に土地引き渡しが行われ、IR 工事が開始されるのでは。

19 回分は、工事を始めるに必要な環境影響評価（アセス）の手続きについて。10 月 28 日にアセス「準備書」が縦覧され、11 月 11 日からカジノ業者による説明会が開かれる。865 ページの準備書を読んだが、方法書に対する市民の意見がほとんど反映されていない。夢洲での他事業との複合的な影響についても、コンテナターミナルについては全く触れていない。SDGs 達成などと言うが、カジノというギャンブルと整合性はあるのか。夢洲の地盤対策は大阪市の事業と逃げていることも問題だ。

20 回分は、大阪・関西万博の厳しい現実について。会場建設費は 500 億円上振れして 2350 億円になったが、万博協会との協議でも、「大屋根」など規模縮小は検討もされていない。SDGs を掲げているが、半年間で世界最大の木造建築物「大屋根」は解体撤去される。「静けさの森」には、大阪府内の公園の木を切って植えるそうだ。協会の職員は与えられた仕事だけをこなすという感じであった。

21 回分は、愛知万博を振り返りながら、大阪・夢洲万博の現実、開幕まで 1 年半を切ったなかで「中止」を求める声の広がり注目する。このまま開催に突き進んでいいのか、BIE（博覧会国際事務局）は万博の理念からも「警告」を発しないのか、夢洲の土地所有者としての大阪市も、その責任が問われるのではないのか。

(2023 年 11 月 10 日)